

全村離島とその住民意識

経済成長期初期における一島嶼トウシヨの事例から

Immigration of all Inhabitants from an Island:
The Actual Situation of Lives, and their Thoughts about Education

松平信久

MATSUDAIRA, Nobuhisa

【要旨】 昨今、各種の自然災害、人為的災害、あるいは社会的・経済的要因などから、地域住民がその居住地からの移転を余儀なくされる事例は枚挙に暇がない。本研究ノートでは、それらに先立つ同根の事例である八丈小島の全村離島を取り上げその要因を探る。また、その際に行った住民対象のアンケート調査に基づき、移住問題に対する当事者の意見や期待、その前提となる生活、教育、医療などに関する意識などを検討する。

八丈小島の二つの小中学校は、へき地教育振興法により、自然、地理、文化的諸条件が最も厳しい5級へき地校に指定されていた。同島からの住民離村は、先の東京オリンピック開催の5年後であり、我が国は高度経済成長期の真ただ中であつた。しかし同じ東京都の施政下にあつても、その流れから大きく取り残された地域があつたことは、第2回目の五輪開催を目前に控えた今日、銘記されるべきであると考えらる。

本稿の構成は以下のとおりである。

- I. 序論 1. はじめに 2. 本研究ノートの目的 3. 八丈小島概観
- II. 住民対象意識調査
- III. 鳥打小中学校文集『八丈小島』から
- IV. まとめ
- V. 資料

キーワード 全島離村、八丈小島、住民意識調査、高度経済成長、へき地教育

I. 序論

1. はじめに

筆者は大学を卒業した直後の1963(昭和38)年4月から1966(昭和41)年3月までの3年間、小学校教員として、伊豆諸島の一つである八丈小島の東京都八丈町立・鳥打小中学校に赴任した。八丈小島は八丈島の属島で、面積3.1km²の文字どおりの小島である。島の両端に宇津木、鳥打という二つの集落があり、計120名ほどの住民が住んでいた。鳥打は二つの集落の中では大きいほうであったが、それでも、地区の住民数が68名(筆者の赴任当時。但し教員7名とその家族を除く)という少数であった。その構成は、乳幼児6名、小学生・中学生計26名、成人36名で、成人の大半が50歳以上であった。産業といえるものは皆無であることなどから、住民が居住し続けることが困難となり、1969(昭和44)年の1月から6月にかけて両集落の全住民が離島した。同島はそれ以来無人島となり現在に至っている。

昨今、各種の自然災害、自然的・人為的災害の複合要因、あるいは社会的・経済的要因などから、住民の居住地からの移転を余儀なくされる事例は枚挙に暇がないが、同島の事例はそれらに先立つ同根の事例である。いずれの要因によっても、生まれ育った場所から離れることを余儀なくされ、帰還できる家郷を失った当事者の思いは察するに余りある。

筆者はこの全島離村が実施される2年前の1967年——その頃はこの問題をめぐって島民が関心を高め、その是非を話題にし、期待や不安を募らせていた時期である——に、鳥打地区の住民を対象とした意識調査を行った。移住の是非、それに対する期待や不安、補償問題、離村の前提となる、生活一般、学校教育などに関する意識を質問紙により回答を求めたものである。

この調査の結果については、その後発表や報告をしないうちに放置してしまった。半世紀も前の事例であるが、上述のようにこの事例は、現在多く生起している地域遺棄につながるものであり、同類の課題を孕むものであると考えられる。そこで敢えてこの時期にこの調査結果を報告し、同様の事態にも共通する問題理解の一助になることを期するものである。

時あたかも、第2回目の東京オリンピックの招致が決まり、それに対応した都市再開発がさまざまに画策され議論されている。八丈小島の全島離島が行われた1969年は、第1回目の東京オリンピックが開催されてから5年が経過し、日本は高度経済成長の登り坂をわき目もふらずに上りつつあった時期である。そのような時にあっても、東京都の施政下にあつてなお、後述のような状況のまま取り残されていた地域があったことを、私たちは改めて記憶に留めたいと思う。

2. 本研究ノートの目的

- (1) 全島離村を余儀なくされた八丈小島の諸状況について概観する。このことは、高度経済成長期初期にあつても、その埒外に置かれ、あらゆる文化的環境から隔絶していたへき地およびその学校の姿を記録として残すことになろう。
- (2) 移住を控えた住民を対象としたアンケート調査やその他の資料から、その問題に関する当事者の見解を探り、またその背景となる日常生活、学校教育などに対する意識や実態を明らかにする。
- (3) 上記(1)、(2)を通して、居住地域からの撤退を余儀なくされた昨今の事例と共通するとと思われる問題点を提示する。

3. 八丈小島概観

- (1) 八丈小島は、伊豆諸島の一つである八丈島から西に約 7.5km 離れ、東京都心からほぼ真南 290km に位置する周囲 6.5km の小さな火山島である。島全体の形状は、標高 617m の大平山^{オオタイラ}が海上にせり上がった様相を呈しており、島の周囲はほとんどが海食崖の絶壁からなっている。
- (2) 南北に細長い形をした同島には、島の南東端に宇津木、北西端に鳥打という二つの集落があった。前者の人口が約 40 人（教員およびその家族を含む）、後者のそれが約 80 人（同）であった。両集落間は陸路、海路とも行き来が困難で日常的には往復が途絶しており、それぞれが孤立状態にあった。上記のような島の形状から、船が接岸できる場所はほとんどなく、両集落には僅かに岩礁の僅かな隙間にコンクリートを流し込んだだけの船着き場があった。したがって少しでも海が荒れれば船の発着は不可能となる。小島と八丈島本島間には、週に一便、定期船と称する漁船を改造した小船が運行されていたが、天候に左右されて欠航することも多く、筆者の在任中の経験では 1 カ月間来航が途絶えたことがあった。とくに鳥打には持ち船がなく、このような場合には外界とのつながりは完全に遮断され、食糧や生活必需品の調達もできなくなった。
- (3) 急峻な地形、火山灰地などの条件から、流水や地下水はなく、飲料水、生活用水はすべて天水を貯水タンクに貯めて使用した。不完全な貯蔵槽であったから、枯葉、砂塵、ポーフラ、その他の混入は不可避であった。平坦地がないことから農作物も限られ、甘薯、里芋などの主食作物、野菜類などが自家消費用に作られただけであった。米作は皆無で、島民は少なくとも一日一食は芋類を主食としていた。
- (4) 八丈小島にはこれという産物もなく産業もなかった。農業は上記のように自家消費的な作物の生産が中心であった。わずかにフリージアの栽培（花卉、球根育成）、椿油用の椿の実の採取、仔牛を購入し成牛にして売る畜産、岩ノリ、天草などの採取が換金可能な「産業」であった。島の近海は豊富な漁場であったが、船着き場、船、電気、人手を欠く条件のもとでは販売を目的とした漁業は不可能で、手作業による囲い網、素潜り、釣りなどによって自家消費用の漁獲を得るにとどまっていた。そこで島民にとって重要な現金収入の途となっていたのは失業対策事業である。これにはほとんどの成人男性が参加したが、山道の補修、学校や集落地の草取りなど比較的軽微な作業（大規模な土木工事や作業は実施されたことがなかった）に従事していた。高齢の夫婦、一人暮らしの人たちは生活保護費受給者となっていた。
- (5) 島にある公的・私的施設は学校だけで、他の公的機関や商店などは一切なく、医師もおらず、電気の供給も無かった。自給できない生活用品は上記定期船によって調達し、風邪や腹痛、軽度の怪我などは学校の教師による手当てなどで対応し、灯火はランプが用いられていた。ただし、鳥打では、1964 年から、学校用のディーゼル発電機を用いて一家に一灯分だけ夜の 2 時間程度配電が行われるようになった。電柱用の木材の切り出しや電柱立て、配線工事は島民が行い、毎晩の発電操作は教員が交代で担当した。
- (6) 宇津木、鳥打の両集落にはそれぞれに独立した、八丈町立の小・中学校併設校が設置されていた。両集落を合わせてもせいぜい 100 人強の人口しかないのに二つの併設校があった

のは、前述のようにこの島の地形が急峻であることから、日常的には双方はほぼ孤立状態であったためである。

へき地学校は、へき地教育振興法により、自然、地理、文化的諸条件、および交通、医療、金融などの利便性から、1級から5級までの等級が定められている。八丈小島の二つの小中学校は、共に条件が最も厳しい学校が指定される5級であった。この学校の諸条件は振興法による指定要因ごおりの厳しさであったが、ただ他地域のへき地校に比べ、児童生徒数に対する教員数では恵まれていた。鳥打校では小中学生を合わせた在校生が25名程度に対して教職員7、8名、宇津木では10数名に対して6名ほど、計30数名に対して15名程度であり、約2対1の割合である。手厚い人事配置であったが、人件費を含む教育予算の負担が全員離島を促す行政側からの大きな要因となっていたことは十分に推測できる。なお、教員数では恵まれていたとはいうものの、複式学級の編成は免れえず、教員は、免許教科以外の教科担任も分担した。筆者は小学校中学年の学級担任のほか、中学校の数学、小・中全校の音楽を担当した。

また、中学校を卒業した生徒は、全員が小島を出て、八丈本島または本土での進学か就職かの道を選んだ。そして、ひとたび小島を出れば、そこに戻ることはごく稀である。人口減は必然であった。

- (7) 筆者は、この学校に赴任する前に、へき地教育に携わった教師の実践記録を何冊か読んでいた。それらのほとんどに共通するのは、厳しい自然環境、貧しい生活、労働に明け暮れる家族や本人の姿、外部の人たちに対して閉鎖的な村人たち、寡黙で表情に乏しい子どもたちなどの記述であった。「へき地性」と名づけられたこれらの特性は、当地でも当てはまるが多かったが、閉鎖性、寡黙、無表情などに関しては、ここでは、予想や先入観を改めなければならなかった。勿論個人差はあったものの、住民は、概して気さくで親切な人が多かったように思う。子どもたちも概ね人懐こく活発で、反面、自己主張もかなり強かった。親同士の力関係や経済力の差などが、子どもたちの集団力学や交友関係に影響を及ぼしていた面もあったが、それが日常生活を強固に支配するところまでは至っていなかったように思われる。

しかし一旦、八丈本島や本土に出れば、子どもたちがそこで引け目や気おくれを感じるものがあつたことは否めないであろう。なぜならば、経験の幅や種類は他に比べて著しく制限され、地域や学校、家庭における諸施設・設備も貧弱ないし皆無であったから、それに対応した知識や「学力」も多くの制約を受けていたからである。

- (8) 島の家屋はすべて平屋建てであった。台風などによる風雨の強さは猛烈で山の斜面に散在する家々は、防風樹に囲まれて隠れるように建っていた。屋内は炊事用の竈を備えた土間と、板敷の部屋が1~2室という構造であった。五右衛門式の風呂と便所は屋外である。ほとんどの家に畳はなく、外板と板戸で囲まれただけの家はガラス戸やガラス窓もなかった。したがって悪天候の日に板戸を閉めれば屋内は真暗くなり、必要であればランプを灯すしかなかった。居住環境は一般と比較して大きく立ち遅れていると言わざるをえなかった。
- (9) 学校以外の施設が皆無である当地では、娯楽の機会も限られていた。村祭りなどの伝統行事は行われていたが、宗教的な対立などから、集落をあげての行事としての性格は失われていた。そのような中で、運動会、学芸会などの学校行事は地域全体の最大の楽しみであ

った。ほかには数カ月に一度の巡回映画会があったが、演目はいわゆる教育映画が主で娯楽性は乏しかった。電気が無いことからテレビは見られず、新聞は購読するとしても大幅な遅配は避けられなかった。そのような状況下でのトランジスタラジオの普及は絶大な恩恵をもたらしたといえる。また、成人男性の楽しみは飲酒に向けられ、昼からの飲酒や酩酊もしばしば見られた。そのために働くことが不可能となり、また健康を害する例もあった。

- (10) この島には固有の風土病である「象皮病」(バク)があり、住民および赴任者の懸念となっていた。これは蚊の媒介によって体内に潜入したフィラリアが数十年を経て増殖するもので、足、男性生殖器などの体の一部が肥大し、象の皮膚のような形状を呈することからこの名がつけられた。私の在任中にはすでに新しい発症はなかったが、数十年前までは患者が多発したという。(後掲, IV. D. 参照)。1963年夏には、東京大学医科学研究所(前年まで伝染病研究所)の研究者チームが来島し、2週間にわたって診察と研究にあたった。

II. 住民対象意識調査

1. 調査の方法など

- (1) 調査時期 1967(昭和42)年1~3月
- (2) 調査対象者 東京都八丈島八丈町鳥打地区在住成人全員36名(20戸)の内、高齢などのため筆記回答不能者4名を除く32名(17戸)
- (3) 調査方法 質問紙によるアンケート調査(無記名) 調査用紙の配布および回収は直接手渡しで行った。
- (4) 調査者 松平信久 調査用紙配布回収協力者 風間幸雄氏

2. 回答者プロフィール

- (1) 回答者数 男 11 女 13 計 24
- (2) 回答率 調査対象者32名に対する回答率 75.0%
鳥打住民の内成人全員36名に対する比率 66.7%
- (3) 回答者の年齢
男 71, 69, 68, 59, 55, 54, 49, 47, 36歳 無回答 2
女 68, 65, 65, 56, 49, 47, 47, 45, 45, 35, 25歳 無回答 2
- (4) 最終出身学校
鳥打校 5, 鳥打小学校 4, 鳥打中学校 1,
(以下各1) 大日本国民中学舎, 小笠原専修女学校
富士中学校(八丈島), 元町高等小学校(伊豆大島), 宇津木校(八丈小島) 無回答 9

3. 意識調査の集計結果より

以下に、意識調査の設問を問題別に取り上げ、回答について集計、検討を行う。

(1) 離村に関する意見と懸念

- 1) 「鳥打の移転の問題については、どうお考えになりますか。次のうちから一つにだけ○をつけ

て下さい」(質問番号 17)

〈以下の回答の記述にあたっては、選択多数順に項目の並べ替えを行った〉

選択数 1 位 「十分な補償をしてもらえるのなら小島を出たい」	13
2 位 「今がよい機会なので、補償がたとえ十分でなくとも、小島を出たい」	6
3 位 「自分たちの土地を軽々しく離れるようなことはせず、もっと努力して小島の発展につくすべきだ」	3
4 位 「小島での生活は一応安定しており、他に出て働くよりは楽なので、小島は出たくない」	1
その他(回答者による記述)	
「年をとっているので、行かなくともよいが、保護を受けているので出るといわれれば出る」	1

2) 「もし移転が可能になった場合、その後の生活についてはどうお考えですか」(質問番号 18)

- | | |
|-------------------------------|----|
| ① 不安である | 11 |
| ② なんとかやっていく自信があるので、あまり心配していない | 6 |

3) (上の回答が②の場合) 「一番心配なことはなんですか」(質問番号 18)

選択数 1 位 「仕事のこと」	6
2 位 「子どもの教育のこと」	5
3 位 「今までと違った生活になれることができるか」	2
4 位 「住む場所のこと」	0
その他(回答者による記述)	
「どういう生活、だれが世話をみてるか」	1

(2) 生活実態・意識や教育などに関する意見

上記 3 (1) 1) で見たように、住民の多くは離村を希望していた。その全村離島を促した背景について、関連する回答を検討してみよう。

1) 島での生活の困難点について

「鳥打での生活で困ると思うことはどんなことですか。一番困ることから 3 番目まで、○の中に 1, 2, 3, の順番をつけて下さい」(質問番号 16)

() 内は選択順位と選択数。以下同じ。

〈選択多数順〉

- | | |
|--|--|
| 1 位 「医者がないこと」 | |
| 計 18 (1 位 = 14, 順位指定なし = 4) | |
| 2 位 「子どもの教育が十分にできないこと」 | |
| 計 15 (1 位 = 2, 2 位 = 8, 3 位 = 1, 順位なし = 4) | |
| 3 位 「社会の進歩についてゆけず、どんどん遅れてしまうような気がする」 | |
| 計 12 (3 位 = 7, 順位なし = 5) | |

- 4位 「電気、店などが十分でなく、毎日の生活が不便である」
計8(2位=3, 3位=1, 順位なし=4)
- 5位 「小島での経済的生活が苦しい」
計7(2位=1, 3位=4, 順位なし=2)
- 同 「年をとってから、身寄りのないこと」
計7(2位=1, 3位=2, 順位なし=4)
- 7位 「娯楽の設備がないので、毎日の生活に楽しみがない」
計1(2位=1)
- 8位 「人づきあいがわずらわしい」
計0
- その他 「ハサミの入った着物を着たい」「マキがないのが不安」 各1

2) 学校教育についての意見

上の回答に見るように、島民の感じている不便、不満は、無医村であることに続いて教育問題に多いことがうかがえる。そこで、学校教育についての意見を見てみよう。

i. 「鳥打の小中学校に在学している子どもさんがいますか」(質問番号3)

①いる=14

⇒いる場合の人数 1人=4, 2人=4, 3人=6

②いない=10

ii. 「現在の鳥打の学校について、次のうち1つを選んで○をつけて下さい」(質問番号4)

③もっと改善して欲しい点がたくさんある 11

①大体満足している 6

②このような小さな所では、これ以上望むのは無理だと思う 5

無回答 2

iii. 「学校に改善して欲しい点があるとすれば、それは次のどんな点ですか。一番望むことから3つまでを選び、○の中に1. 2. 3. の順番をつけて下さい」(特に不満がないと思う方は書かないで結構です)(質問番号5)

1位 「先生の交代がはげしいので、もっと長くいて欲しい」

計18(1位=3, 2位=7, 3位=2, 順位の指定なし=6)

2位 「よい先生にきてもらいたい」

計12(1位=5, 2位=1, 順位なし=6)

同 「学習指導にもっと力を入れて欲しい」

計12(2位=1, 3位=5, 順位なし=6)

4位 「ことばや礼儀のしつけをきちんとして欲しい」

計11(3位=2, 順位なし=9)

5位 「先生のご家庭訪問をもっと多くしてもらって、学校の様子をききたい」

計 8 (2 位 = 1, 3 位 = 2, 順位なし = 5)

6 位 「部落と学校で一緒に楽しめる行事を増やし, 学校と部落のつながりを増やして欲しい」

計 6 (2 位 = 1, 3 位 = 1, 順位なし = 4)

7 位 「設備や教具をもっと増やす」

計 3 (1 位 = 2, 2 位 = 1)

8 位 「予算を増やして, 教室や運動場を広げる」

計 2 (1 位 = 2)

3) 生計の状況について

島民が離村を希望する理由として, 生計上の困難があることは, 上記 2, 1) の回答にも表われている。生計上の収入, 支出, 土地保有状況などについて尋ねた質問には, 無回答が多かったが, 寄せられた回答から, ある程度の生計状況は推察できる。以下その回答を検討してみよう。

i. 年間収入総額 (質問番号 21 選択肢項目の選択による)

① 5~10 万円	
② 10~15	1
③ 15~20	
④ 20~30	1
⑤ 30~40	3
⑥ 40~50	1
⑦ 50~70	2
⑧ 70~100	
⑨ 100 万円以上	
(生活保護受給)	3

ii. 年間収入の大体の内訳 (質問番号 22 項目は質問紙に予め設定した)

回答例① (回答中もっとも高収入であった事例, 家族構成 夫婦 2 人)

失業対策事業	27 万円
農業・牛飼育	15 万円
漁・水産関係収入	10 万円
その他	3 万円
計	55 万円

回答例② (家族構成 夫婦, 子ども 3 人 計 5 人)

失業対策事業	20 万円
農業・牛飼育	5 万円
漁・水産関係収入	5 万円
計	30 万円

回答例③(家族構成 夫婦, 子ども3人 計5人)

失業対策事業	27万円
漁・水産関係収入	5~6万円
計	32~3万円

iii. 一月平均の支出金額(質問番号23 自由記述)

回答例①(家族構成 夫婦, ほかに八丈本島に居住する子ども複数。年間総収入は無回答)

支出金額 55,000円

〈内訳〉

生活費(食・衣・燃料など)ほか 25,000円

仕送り 30,000円

回答例②(家族構成 夫婦, ほかに八丈本島に居住する高校生の子も1人年間総収入35万円)

支出金額 26,000円

〈内訳〉

生活費(食・衣・燃料など) 12,000円

原材料(材料・種・子牛など) 3,000円

仕送り 10,000円

その他 1,000円

回答例③(家族構成 1人 年間総収入 無回答)

支出金額 3~4,000円

〈内訳〉

生活費(食・衣・燃料など) 支出の全部

〈注と考察〉

上述のように年間総収入や支出合計に関する質問への回答数は少数であり、住民全体の経済状況を精確に把握することはできなかった。しかし(当然のことながら)、戸別に収入差が大きいことはiやiiの回答から知ることができる。また現金収入額が多い場合でも、生計に余裕がある世帯は限定的であろう。参考までに一例をあげれば、筆者が大学卒業直後に当地に赴任した際の初任給(本給)は、月額19,800円であった。

なお、冒頭の「はじめに」(4)でも述べたように、失業対策事業はこの地の住民にとっての現金収入源として大きな割合を占めている。成人男性のほとんどはこの事業の対象となっていた。また高齢で一人暮らしの所帯(すべて女性で、鳥打に4所帯あった)は生活保護の対象であった。

一月当たりの生活費を聞いた質問には、回答が少数で、その記述も曖昧であったことから、現金支出の正確な把握はできなかった。ただし支出が概して少ないことは明らかである。それには小島での生活が自給自足的性格の強いこと、加えて島内に商店がなく、買い物もできなかったこともその傾向を強めたといえる。また例に見られるように、子どもが島外の学校に通学中の場合

には、仕送りがかなりの負担分となっていることがうかがえる。

4) 土地保有状況

「所有する土地の面積をお書きください。

畑(), 山林(), その他()」(質問項目 24)

回答① 畑 4 町歩

回答② 畑 2 反歩, 山林 2 町 5 反歩

回答③ 全部で 1 町歩

回答④ 1 反 5 畝

〈注〉 この質問への回答も上記のように 4 戸に限られており、全戸の状況は未詳である。しかし、小島には大地主と呼ばれるような家はなかったため、上の所有状況は、地区住民の土地所有状況のある程度代表していると考えられる。なお上記の単位は、1 畝は 30 坪 (= 歩) (約 1 アール), 1 反 (= 段) は 10 畝 (300 坪 = 約 10 アール), 1 町は 10 反 (3000 坪 = 約 1 ヘクタール) である。また、「反」や「町」の表記や口述にあたっては、「～反歩」, 「～町歩」など「歩」をつけることが多い。

3. 移転先や仕事の希望と補償問題

(1) 「移転先の希望と、仕事の希望をお書き下さい」(質問番号 19)

i. 移転先 ①八丈本島 = 8 ②東京 = 6 ③無回答 = 10

ii. 仕事の希望 「農業」= 2 「家でできる仕事」= 2

〈以下各 1〉 「技術関係」, 「洋裁」, 「なし (年なので)

「好きなことは歳だからできない」

(2) 「補償については、どのような希望をお持ちですか。なるべく率直な御意見をお聞かせ下さい」(質問番号 20)

〈自由記述による回答〉

補償額 (1 人あたり)	100 万円	5
	100 万円あたりか?	1
	100 万円以上	1
	200 万円	2
	300 万円	1
	300 万円～400 万円	1
	400 万円	1
	500 万円	1
	1000 万円	2
	「分からない (死なないように)」	1
	無回答	8

〈その他の条件〉 「住む場所、仕事などを世話してほしい」

「金だけもらえればよい」「住居の心配をして欲しい」

〈注と考察〉

離村に際しての住民の懸念は、移転先での生活のようすや子女の教育と並んで、先祖代々に及ぶ生活空間であった土地を手放さなければならないことであったと考えられる。したがって個人所有地に関する補償問題が当事者にとっての重大な関心であったことは言を待たない。行政当局は、この問題への対応策として、島民の土地私有面積に応じて、東京都がそれを買い取ることにした。買取価格については島民とのあいだで折衝が行われたが、在住地主は坪(3.3㎡)あたり93円、不在地主は60円で決着した。住民側は、それぞれ100円、70円の要求をしたが都側は譲らず、在住地主に対してのみ3円アップする93円を妥協案として提示し、それで決着したとのことである。買取の対象となった土地の地目の条件などについて、筆者はそれを確かめる手立てをもたないが、アンケート調査での土地所有面積への回答から一戸当たりの買取額を推定してみよう。

上記2. 4)の回答の中で最大の土地所有は、4町歩(畑)である。この土地の買い取り価格を坪単価93円として計算すると1,116,000円となる。この土地所有者に、仮に500坪の家屋敷分の土地が他にあるとして合計すると、1,162,500円である。以下回答②は、753,300円、③279,000円、④41,850円(家屋敷分は含まない)となる。いずれにしても1人当たり数百万円の補償を希望していた島民の期待とは大きな隔たりがあったことが推測される。

4. 教師、学校、子どもの成長に対する願い

教師への願い、子どもの教育や成長への期待、回答者自身の学校との関わり(PTA活動)などについての意識を探ってみよう。

1) 期待する教師像

「鳥打のような所では、どういう先生が一番よい先生だと思いますか。よいと思うものを3つだけ選んで○でかこんで下さい。(質問番号6)

選択数1位	「勉強を熱心に教える先生」	15
2位	「経験があって、教え方がうまい先生」	12
3位	「だれに対しても公平な先生」	10
4位	「きちょう面で、責任感の強い先生」	9
5位	「明るくて、ほがらかな先生」	5
6位	「子どもに対して思いやりがあり親切である先生」	4
同	「気軽に話ができて、家をよく訪ねてくれる先生」	4
8位	「若くて元気のよい先生」	2
同	「部落の発展のために骨を折ってくれる先生」	2
その他	「**先生、○○先生がよい(実名)」	1

2) 「あなたのお子さんには、どんな子になって欲しいですか」〈質問番号9〉〈自由記述〉

「先生」 2

(以下各1)

「社会生活を完全に営めるに人間になって欲しい」

「明るく責任感のある子」

「明るくてすなおな子」

「明るくほがらかで責任感の強い子供になって欲しいと思います。」

「しょうじきで人から信頼される子になって欲しいです。」

(3) PTAの活動について

i. PTAの会合について(会員の方だけで結構です)〈質問番号11〉

- ① 少なすぎる 6
- ② 大体よい 4
- ③ 多すぎる 0

ii. PTAの活動について〈質問番号12〉

- ① もっと活発にやるべきだ 8
- ② 今くらいでよい 1

iii. 「もっと活発にするとしたら、どんなことをふやせばよいですか。よいと思うものに○をつけて下さい」〈質問番号13〉

- ① みんなで話し合う会 12
- ② 浜あそびのような行事 6
- ③ 学校の行事(運動会, 学芸会など)にもっと進んで協力する 7
- ④ みんな(会員)の読める本や雑誌をそろえる 7
- ⑤ その他 0

〈注と考察〉

貧弱な施設や設備, 始終入れ替わる教師たち一住民はそのような状況に不満や不安を抱きながらも, 島内でただ一つの施設であり, さまざまな地域サービスにも関わる学校や教師に期待も寄せている。学校を中心としてせいぜい2~300メートルの同心円内に位置している集落であるから, 島民と教師の日常的な接触も多く親しみも増す。島民たちが経験したこのような学校と教師との関係は, 離島後の教育のイメージに消しがたい影響を残すに違いない。4. 1)の質問では, 教師への期待を, 「鳥打のような所では」と限定条件をつけているが, 回答からうかがえる教師像は, 移転先にあっても望まれる教師イメージであろう。

子どもたちの成長に託す親や地域の人びとの願いは, 時代や土地の違いを越えて共通なものがかがえる。

当地では, 子どもをもたない住民や, 子どもがすでに学校を卒業した親の場合でもPTAの会員になることができた。そのことから, 住民のPTAに対する関心はかなり高くまた積極的であった。

Ⅲ. 鳥打小中学校文集『八丈小島』から

全村離島を目前に控えた昭和44(1969)年3月15日付けで、上記文集の最終号が発行された。手書きガリ版刷り手製本で120ページの文集である。同文集には作文、短歌、俳句、読書感想文などと並んで、離島に関する文章も採録されている。児童生徒のほか、成人島民、教員の文章も含まれている。以下、これらの中から、離島に関する島民の思いを数編引用する。

A. 小1 K.Y 「ひっこし」

わたしはしま(筆者注:「しま」は八丈本島をさす)にひっこすのがよかったんだけど、いやになりました。

だけど、しまに行くのもいいですね。ひっこすと、みせもあるし、がっこうの子もいっぱいだし。

だけど、わたしをともだちにしてくれればいいけれど、ともだちにしてくれなきゃいやです。

みんな、ともだちがなければいやでしょうね。

B. 小5 K.Y 「小島のひっこし」

小島はひっこすことになった。私はいやだ。東京の人たちがくると、「空気や海がきれいだ」という。みんないいところだという。なぜひっこすのがそんなにいいのだろう。だれが、「ひっこそう」といいたしたのだろう。考えてみるとなんだかさみしくなる。そんなにひっこしたかったら私の生れるまえに、ひっこせばよかった。自分の生れ故郷をすてるなんてさみしくてさみしくてたまらない。(中略)

私が「いやだ」といえば、おとなはきっとこういうだろう。「どうせ学校を卒業したらでていくくせに」と。でも、かえてこられるならいい。(中略)

はかの中のおじいさん、おばあさん、ひっこすのはいいだろうか。きっと、いやだと思う。「自分たちは、死ぬまでくらしところだ」というだろう。(中略)

私がこういっても、どうにもならない。ひっこしはもうしょうがないことだ。

C. 小6 I.M 「ひっこし」

やっと、ひっこすことが決まった。私は大賛成だ。いちばん心配なのは、ひっこしてから通う中学校と、私たちの住む家はどんな所だろうということだ。学校には悪い子がいるのだろうか。家の近所に同級生がいるだろうか。とうちゃんたちを置いていくのがさみしい。でも、五、六年もたてば、とりにくる。やっぱり自分の生れた故郷がなくなるのはいやだ。(中略)

今はひっこすのがたのしみでも、八丈に行ってから「なぜ、あんない所からひっこして来たのだろう。なぜ、あるときひっこすことに賛成したのだろう」と思うときもあるだろうか?(中略)

いつ八丈へひっこすか、私はたのしみだ。

(筆者注:この児童の父親は離島を寸前にして亡くなり小島に葬られた)

D. 70歳 S.C 「変わりゆく小島」

いつの時代から人が住みはじめたという事ははっきりしないが、明治の初め頃は、鳥打だけに、四百人位の人が住んでいたことは、年代記に記されている。

それが、明治四十二年の調査記録によれば、二百二十四人と、約半数にへっている。

更に昭和一八年当時は、百人前後、そして現在は五〇人に満たない。この様に人口がへり、近いうちに全員引揚げ無人島になる原因は何であろうか。

普通には、離れ島の不便さにあきた人々が次々と離島したと考えられるが、私はそれ以上にフィラリア病(方言でバクという)に原因があると思う。この病気にかかると、手足共に関節より先は、普通の人の倍位になり、どうしてもなおらない。明治時代の住民の約半数は、この病気にかかっていた。これに関し次の民謡ある。

わりゃないやだよ この小島には ここはバク山 カブラ山

カブラとはおおかぶのことであり、明治初年頃はサツマ芋は栽培されておらず、島の頂上の大平山を開墾してかぶを植え、これを副食として生活したと聞かされている。(中略)

このように、風土病が人口減少の第一の原因と考える。この風土病は現代医学のおかげで、媒介する動物がわかり、予防薬もでき、現在は両部落ともに保菌者を見出すことができなくなった。

とはいえ、両部落あわせて七十五人たらずの人口では、近い将来未就学児童もいなくなることに必至であり、親心としては、子供を時代の流れに遅らせることはしのびなく、狭い心にむち打って、一丸となって引揚げること決定したのである。

(筆者注)

離村直前の1969年当初の鳥打地区の人口は47名(教員とその家族を除く)で、その構成は、成人30名、中学生以下の子ども17名である。上述の僅か数年前1963年当時の人口68名と比べてその減少数は顕著である。(21名減の内訳は、成人の死去6名、中学卒業や転校による子どもの転出が15名である。甚だしい過疎化現象と言わなければならない。

IV. まとめ

このような形での全村離島は当時としては珍しく、華々しく見えた経済成長が進む裏面の事態として特異性ももっていたといえよう。八丈小島の離村は、一応住民の希望によったものではあったが(「一応」というのは、在留を希望したとしても、多数者が離島した後の小島での生活は、事実上不可能であったことによる)、離村条件は希望したものとは程遠く、また離島に際して不慮の不幸に見舞われた方もあった。離島後の新しい生活が思いどおりに展開したとは限らず、当事者の方々が直面した苦労や困難も大きかったと思われる。

その後、要因や形態は一様ではないが、離村、離郷の事態は各地で多く生じている。なかでも東日本大震災による居住地からの撤退は、住民の方の意志とは全く関係なく、いやそれに逆らっても行われた点で、その問題点は深刻である。

高齢化、過疎化、自然的・人為的災害などによる、地域からの撤退や放棄は、日本全体の産業構造や人口動態の縮図であろう。それだけに問題の根は深く、対応や対策も容易には見いだせない。筆者にも特別な提案や提言ができるわけではない。ただ、そのような事態が起こる可能性がどこにでもあることを私たちは改めて心すべきであろう。また、その場しのぎの見通しを欠いた対応や施策が、のちに、幾倍もの負荷となって予想外の広範囲に及ぶ危険性についても、私たちは昨今の経験から学び、将来への警鐘として受け止めなければならない。

無人島になった八丈小島では、住民が、離島に際に放し飼いに置いてきたヤギが繁殖して草木を食べ尽くした。そのために地崩れが生じ、土砂が海に流入して漁場を損なうという事態が発生した。これも「想定外」の現象であった。行政官庁ではヤギを捕獲して繁殖を防ぐという対策を講じ、小島の植生を原状に復すことに成功している。原状復帰が極めて難しい昨今の汚染被害などに比べて、対応が効を奏した貴重な一事例である。

近年、この島に天然記念物の絶滅危惧種・アホウドリが営巣を始めたことが話題となった。見捨てられた孤島がまたいつか新しい再生の姿を見せることがあるかもしれない。

ところで、2014年11月2日に、「八丈小島忘れじの碑」の除幕式があった。これは、この島の旧島民有志のほか所縁の人々の発意により、無人島となった島および島民を偲び、この島への旧島民の思いを後世に残すことを期して建てられたものである。海峡を挟んで小島を遠望できる八丈島大賀郷南原の岩礁の浜に建てられた。以下はその碑文である。

「八丈小島忘れじの碑」

この沖合いに望む八丈小島は、一九六九年三月、
過疎化と高齢化により全島民が離村を余儀なくされた。

離島四十五周年にあたり、数百年に及ぶ旧島民の
艱難辛苦を偲んで、「八丈小島忘れじの碑」を建立する。

五十世に暮らしつづけた我が故郷よ

今日を限りの故郷よ

かい無き我は捨て去れど

次の世代に咲かして花を

鈴木文吉（元島打村 村長）詠

二〇一四年一月

八丈小島を偲ぶ有志一同

東京八丈島ライオンズクラブ」

上記の鈴木文吉氏詠による詩文は、島打小中学校の校舎の内壁に、同氏が同島を去る際に、ペンキで書き残したものである。

記念碑建立と除幕式の行事は八丈町の町制施行60周年記念行事の一環としても位置付けられ、

その様子は NHK テレビのニュースなどでも報道された。

なお、この除幕式にちなんで『八丈小島忘れじの心』と題する記念誌も発行された。以下はこの記念誌に掲載された私のエッセイである。

「望郷の賦

かにかくに洪民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの河

望郷の思いを顕わにしている短歌といえば、石川啄木のこの歌が先ず頭に浮かぶ。これをもじって、「かにかくに八丈小島は恋しかり 思い出の山 思い出の海」とでも詠めば、小島を故郷とする人々の思いをかなり言い表すことになるだろうか。啄木の場合は、住職をしていた父親が起こした、寺の運営に関わるトラブルによって、一家が追い立てられるようにして離村したのであったから、宇津木や島打住民の方々の全村離島とは事情が全く異なっている。しかし、心ならずも長年住み慣れた地から去らなければならなかった無念さは、双方に共通していると言えよう。

今日の記念碑除幕の光景を想い描いていると、啄木のもう一つの歌が彷彿とする。

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

右の短歌は洪民の北上河岸の歌碑に刻まれているという。この情景も八丈島南原千畳敷の光景とは著しく異なっている。しかし私には、懐かしさを込めて対岸の景色に向かって立つ、小島記念碑の姿と重なって見える。

この記念碑が小島関係者の故地を偲ぶいしずえとなり、在島中や離島後に亡くなった方々のご冥福を祈り、小島出身の皆様の引き続いてのご健勝を祈るよすがとなることを願っている。

短期間の在島ではあったが、他に故郷と言えるほどのものを持たない私にとって、小島はそれに代わるものと言ってよい。しかし再訪が叶わない状況にある身にとっては、「ふるさと遠きにありて思ふもの」（室生犀星）と自らに言い含めるばかりの昨今である。」

本稿を閉じるにあたり一言お断りしておきたいことがある。旧島民の方の中には、小島での生活のことや離島問題に触れられることに不快や忌避の思いをお持ちの方が少なくないとかがっている。かつての辛く苦しい思い出や、興味本位の取材や報道、各種の場面で経験された偏見や誹謗が、その背景におありかと思う。この小論執筆にあたっては、このような点への配慮を慎重にしたつもりではあるが、なお心ならずも失礼があった場合にはお詫びを申し上げます。

このアンケート調査に回答を寄せて下さった方々はほとんど亡くなられたと思われる。あまり

に遅くなったがご協力に感謝したい。

また、本稿執筆にあたり風間幸雄氏(元鳥打中学校教諭)、高橋克男氏(元鳥民の家族)から、資料や情報の提供をしていただいた。記してお礼を申し上げる次第である。

V. 資料

調 査 用 紙

(ご都合の悪い点については、お書き下さらなくて結構です。)

1. 年齢 歳 男・女(どちらかを○でかこむ)
2. 最終出身学校
3. 鳥打の小中学校に在学している子どもさんがいますか。
 1. いる 2. いない(どちらかを○でかこむ)
 - いる場合 1人 2人 3人
4. 現在の鳥打の学校について、次のうち1つを選んで○をつけて下さい。
 1. 大体満足している
 2. このような小さな所では、これ以上望むのは無理だと思う
 3. もっと改善して欲しい点がたくさんある
5. 学校に改善して欲しい点があるとすれば、それは次のどんな点ですか。一番望むことから3つまでを選び、○の中に1. 2. 3. の番号をつけて下さい。(特に不満がないと思う方は書かないで結構です)
 - 予算を増やして、教室や運動場を広げる
 - 設備や教具をもっと増やす
 - よい先生にきてもらいたい
 - 先生の交代がはげしいので、もっと長くいて欲しい
 - 先生の実家庭訪問をもっと多くしてもらって、学校の様子をききたい
 - 部落と学校と一緒に楽しめる行事を増やし、学校と部落のつながりを増やして欲しい
 - 学習指導にもっと力を入れて欲しい
 - ことばや礼儀のしつけをきちんとして欲しいその他の希望があったら書いて下さい
6. 鳥打のような所では、どういう先生が一番よい先生だと思いますか。よいと思うものを3つだけ選んで○でかこんで下さい。
 1. 明るくて、ほがらかな先生
 2. きちよう面で、責任感の強い先生
 3. 勉強を熱心に教える先生
 4. 子どもに対して思いやりがあり親切である先生
 5. 若くて元気のよい先生
 6. 経験があって、教え方がうまい先生
 7. 気軽に話ができて、家をよく訪ねてくれる先生
 8. 部落の発展のために骨を折ってくれる先生
 9. だれに対しても公平な先生
7. 子どもさんが鳥打の学校に通っている場合、教育費は一人当たり一年間でどのくらいかかりますか。
(学校で集めるお金、文房具、カバン、本、遠足などのお金) 修学旅行はのぞく
円
この金額についてどう思いますか。次のうち1つを○でかこんで下さい。

1. 高いと思う
 2. てきとうだと思う
 3. 子どもの教育のためなら、もっと多くてもよい
8. 子どもさんが鳥打の学校に通っている場合（あるいは近いうちに入学する場合）
（1つだけ○でかこむ）
1. 教育については全面的に学校を信頼している
 2. 全面的に信頼するということまではいかない
 3. 今の状態では、あまり信頼できない
9. あなたのお子さんには、どんな子になって欲しいですか
10. PTAの会費について（会員の方だけで結構です）
1. 高すぎる
 2. 大体よい
 3. かっぱつに活動するならもう少し高くてもよい
11. PTAの会合について（会員の方だけで結構です）
1. 少なすぎる
 2. 大体よい
 3. 多すぎる
12. PTAの活動について
1. もっと活発にやるべきだ
 2. 今くらいでよい
13. もっと活発にするとしたら、どんなことをふやせばよいですか。よいと思うものに○をつけて下さい。
1. みんなで話し合う会
 2. 浜あそびのような行事
 3. 学校の行事（運動会、学芸会など）にもっと進んで協力する
 4. みんな（会員）の読める本や雑誌をそろえる
 5. その他
14. あなたPTAのことに、十分協力していると思いますか。
（会員の方だけで結構です）
1. せいっぱい協力している
 2. かなり協力している
 3. あまり協力しているとはいえない
 4. ほとんど協力していない
15. 上で3か4に○をつけた方は、その理由を次の中から選んで○をつけて下さい。
1. あまり関心がない
 2. 仕ごとがいそがしい
 3. いくらやっても、こういう所では効果がない
 4. 自分の考えとあわない
 5. その他
16. 鳥打での生活で困ると思うことはどんなことですか。一番困ることから三番目まで、○の中に1, 2, 3, の順番をつけて下さい。
- 医者がないこと
 - 子どもの教育が十分にできないこと
 - 小島での経済的生活が苦しい
 - 電気、店などが十分でなく、毎日の生活が不便である
 - 年をとってから、身よりのないこと
 - 娯楽の設備がないので、毎日の生活に楽しみがない
 - 社会の進歩についてゆけず、どんどんおくれしてしまうような気がする
 - 人づきあいがわずらわしい
 - その他
17. 鳥打の移転の問題については、どうお考えになりますか。次のうちから1つにだけ○をつけて下さい。
1. 小島での生活は一応安定しており、他に出て働くよりは楽なので、小島はでたくない。
 2. 自分たちの土地を軽々しく離れるようなことはせず、もっと努力して小島の発展につくすべきだ
 3. 十分な補償をしてもらえのなら小島を出たい
 4. 今がよい機会なので、補償がたとえ十分でなくとも、小島を出たい

18. もし移転が可能になった場合、その後の生活についてはどうお考えですか。
1. なんとかやっていく自信があるので、あまり心配していない
 2. 不安である
 - ⇒ 一番心配なことは？
 - イ. 仕事のこと
 - ロ. 住む場所のこと
 - ハ. 今までとちがった生活になれるか
 - ニ. 子どもの教育のこと
 - ホ. その他
19. 移転先の希望と、仕事の希望をお書き下さい
- | | |
|-----|-------|
| 移転先 | 仕事の希望 |
|-----|-------|
20. 補償については、どのような希望をお持ちですか。なるべく率直な御意見をお聞かせ下さい
- | | |
|------------|---|
| 補償額(1人当たり) | 円 |
| その他の条件 | |
21. 年間収入総額
- | | | |
|------------|-------------|------------|
| 1. 5～10万円 | 2. 10～15万円 | 3. 15～20万円 |
| 4. 20～30万円 | 5. 30～40万円 | 6. 40～50万円 |
| 7. 50～70万円 | 8. 70～100万円 | 9. 100万円以上 |
22. 収入の大体の内訳
- | | | | |
|-------|---|-----|---|
| 農業・牛 | 円 | 失対 | 円 |
| 漁・水産業 | 円 | その他 | 円 |
23. 一月平均の総支出金額
- | | | |
|----|----------------|---|
| 内訳 | 生活費(食・衣・燃料など) | 円 |
| | 原材料(材料・種・子牛など) | 円 |
| | 仕送り | 円 |
| | その他 | 円 |
24. 所有土地
- | | | |
|---|----|-----|
| 畑 | 山林 | その他 |
|---|----|-----|

長いことご協力いただきありがとうございます。貴重な資料として利用させていただきたく思います。ご自愛の上、お励み下さいますようお願い致します。

以上